

# 授業改善につながる「個別教育計画」作成について の一考察

— 自立活動教諭（専門職）とのチームアプローチ —

今村政司<sup>1</sup>

平成20年度より県立特別支援学校に配置された「自立活動教諭（専門職）」（以下 専門職）の役割の一つに個別教育計画作成への支援があるが、その取組状況は明らかではない。そこで、専門職配置校を対象に、現状と課題を整理するためのアンケート調査を行った。その結果、個別教育計画改善に向けた専門職の支援体制は、多くの学校で不十分であることが分かった。そこで、特別支援学校（知的障害教育部門）分教室の実践を通して、授業改善につながる個別教育計画作成について専門職とのチームアプローチの視点から考察した。

## はじめに

平成20年1月の中央教育審議会において、特別支援教育の改善の基本方針で「特別支援教育については、その課題を踏まえ、①社会の変化や子どもの障害の重度・重複化、多様化、②複数の障害種別に対応した教育を行うことのできる特別支援学校制度の創設、③幼稚園、小学校、中学校及び高等学校等における特別支援教育の制度化などに対応し、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育や必要な支援を行う観点から、教育課程の基準の改善を図る。」（中央教育審議会 2008 p. 133）と答申がされた。この答申を踏まえ、平成21年3月に特別支援学校学習指導要領（以下 新学習指導要領）が告示された。

新学習指導要領では、一人ひとりの実態に応じた指導を充実するため、すべての幼児児童生徒に「個別の指導計画」を作成することを義務付けた。

このことについては、「各教科の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成すること。」（文部科学省 2009a p. 182）と規定している。

また、作成上の留意事項として「計画（Plan）－実践（Do）－評価（Check）－改善（Action）の過程において、適宜評価を行い、指導内容や方法を改善し、より効果的な指導を行う必要がある。」（文部科学省 2009a p. 183）「さらに、重複障害者の指導に当たっては、実態把握や指導計画の作成、評価において、より専門的な知識や技能を有する者との協力や連携が求められる場合もある。その際、必要に応じて、専門の医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、心理学の専門家等に指導・助言を求めたり、連絡を取り

合ったりすることが重要である。」（文部科学省 2009a p. 189）と明記されている。

新学習指導要領の告示に先がけ、神奈川県では、障害の重度・重複化、多様化に伴い、児童・生徒への指導に関する専門性を更に高めるために、平成20年度より専門職として理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士を県立特別支援学校へ配置している。平成22年度までに県立特別支援学校25校中12校に配置された。

また、「協働支援チーム宣言」（神奈川県教育委員会 2010）に示された内容をまとめると、専門職の役割の一つとして、個別教育計画<sup>2</sup>の作成と評価への参加を挙げている。このことは、チームの一員として、専門職の知見を生かした関わりが期待されているためである。一方、①教員と専門職の連携や情報の共有はなされているのか。②組織における役割は周知されているのか。③個別教育計画の作成や評価、見直しへの関わりはできているのか。④授業改善に向けた取組みは行われているのか等、校内支援体制の課題も挙げられている。

そこで、本研究では特に、専門職の個別教育計画の作成や評価、見直しへの関わりについての現状と課題をアンケート調査により明らかにし、その課題をA特別支援学校（知的障害教育部門）分教室（以下 A校分教室）の実践を通して、授業改善につながる個別教育計画作成について、専門職とのチームアプローチの視点から考察することとした。

## 研究の内容

### 1 研究の目的

専門職の個別教育計画作成への参加の実態と課題を明らかにし、チームアプローチによる授業改善につな

1 神奈川県立三ツ境養護学校

研究分野（ライフステージを見通した支援教育臨床研究）

2 神奈川県教育委員会（2001）では、「個別教育計画は個別の指導計画を含み込む」と明記されている。

がる個別教育計画作成について考察することを目的とする。

## 2 研究の方法

本研究は、次の二点を中心に研究を進めた。

- ① 専門職が配置されている特別支援学校に対してアンケート調査を実施する。
- ② 調査による課題を受け、A校分教室を対象として研究の方針を立てて事例研究をする。（専門職とのチームアプローチによる個別教育計画の見直し）

## 3 研究の実際

### (1) アンケート調査の実施

#### ア 調査名と目的

調査名を「個別教育計画作成への専門職の役割に関するアンケート調査」とした。また、その目的は「専門職と教職員チームが協働した個別教育計画の作成についての現状の把握」とした。

#### イ 調査対象及び回答者

調査対象は専門職が配置された特別支援学校12校。回答者は専門職が所属するグループ若しくはカテゴリーの総括教諭又はそのグループリーダーとした。

#### ウ 調査内容

アンケート調査の質問項目については第1表に示した。回答は選択及び記述とした。

第1表 アンケート調査の質問項目

<p>I 基本情報</p> <p>① 専門職所属分掌 ② 各校開設部門 ③ 専門職配置年度 ④ 配置されている専門職の職種</p> <p>II 個別教育計画作成への専門職の参加について</p> <p>① 専門職が個別教育計画作成に参加しているケースについて ② 個別教育計画作成時の教員と専門職の意見交換について</p> <p>III 個別教育計画の評価・改善への専門職の参加について</p> <p>① 専門職が個別教育計画見直しに参加しているケースについて ② 個別教育計画見直し時に教員と専門職が話し合う観点について ③ 個別教育計画見直しに専門職が参加した子どもの授業参観について ④ 個別教育計画見直しに専門職が参加できていない理由について ⑤ 個別教育計画作成の充実を図るために専門職に求められているものについて ⑥ 個別教育計画作成の充実を図るために教員に求められているものについて ⑦ 個別教育計画作成の充実を図るための校内支援体制やシステムに求められているものについて</p> <p>IV 専門職配置後の個別教育計画について</p> <p>① 専門職が参加して作成された個別教育計画の内容の変化について ② 日常的な教育実践を通じた教員と専門職の関わりについて</p>
--

## エ 調査及び回答の方法

電子メールを使用

## オ 調査期間

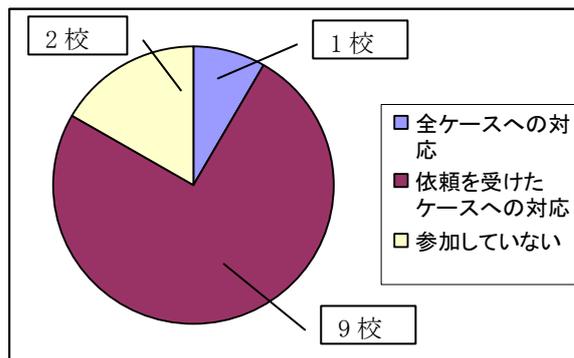
平成22年9月13日から9月24日までの10日間

### (2) 調査回答の結果

調査回答は、12校全てから回収した。調査結果については、専門職の個別教育計画作成と見直しへの参加に関する内容について整理した。

#### ア 個別教育計画作成への専門職の参加について

第1図は、専門職の個別教育計画作成への参加の実態を示している。10校において専門職が作成に参加していた。その内訳については、全ケースへの対応が1校、依頼を受けたケースへの対応が9校であった。

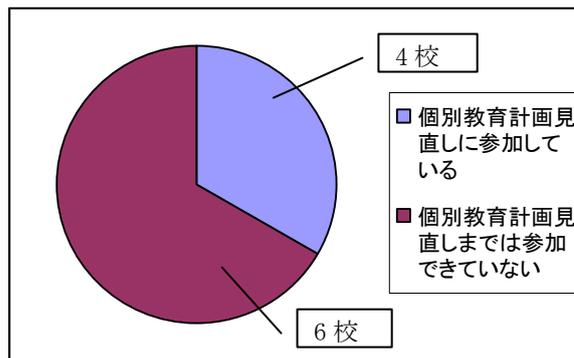


第1図 専門職の個別教育計画作成への参加の実態

#### イ 個別教育計画の評価・改善について

### (7) 専門職の個別教育計画作成及び見直しへの参加についての実態

第2図は、専門職の個別教育計画作成及び見直しへの参加の実態を示している。作成へ参加している10校のうち、4校においては見直しへも参加していた。



第2図 専門職の個別教育計画作成及び見直しへの参加の実態

#### (4) 専門職の個別教育計画見直しへの参加状況

専門職が個別教育計画見直しへ参加している4校の状況は、「年間計画に位置付けて全ケースに参加する」が1校、「担任からの依頼に応じて参加する」が1校、「個別教育計画作成に参加したら、見直しにも参加する」が1校、「子どものケースによって参加する」が

1校であった。

担任と専門職の個別教育計画見直し時の観点については、「目標設定の適性について」「教材教具の使い方や分かりやすさについて」「指導内容・方法について」「学習環境や整備について」の四つが挙げられた。

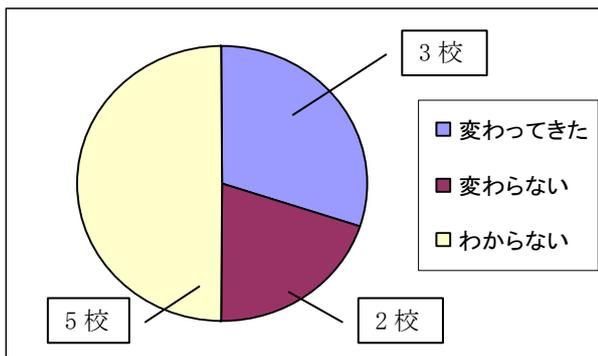
#### (ウ) 個別教育計画の見直しに参加できていない8校の実態

専門職が個別教育計画の作成に参加できていない理由として、「専門職配置から間もないために校内体制が十分ではない」「専門職の役割が校内で周知されていない」「個別教育計画を意識した関わりをしていない」「個別教育計画の作成は周知されているが個別教育計画見直しは周知されていない」「見直しまでは間に合わない」等が挙げられた。

#### ウ 専門職の役割や参加について

##### (7) 専門職が個別教育計画作成に参加している10校の個別教育計画の内容について

第3図は、専門職配置後の個別教育計画の内容の変化について示している。「個別教育計画の内容が変わってきている」と回答した学校が3校、「変わらない」が2校、「わからない」が5校であった。



第3図 専門職配置後の個別教育計画の内容について

#### (イ) 日常的な教育実践を通じた教員と専門職の関わりについて（上位三つを選んで回答）

回答結果は、「子どものことに関して気になることや気が付いたことはどちらからともなく報告し合うようにしている」が12校、「専門職は学校場面を通じて更に子どもの様子を知ろうとしている」が10校、「専門職がいつでも授業を参観できるようにしている」が8校であった。

#### (ウ) 個別教育計画の作成の充実を図るために教員や専門職に求められるものについて

教員に求められることとしては、学校として「専門職とのチームアプローチへの意識を更にもつこと」「個別教育計画の作成時に専門職を更に活用すること」「専門職の専門性を理解すること」が挙げられた。専門職に求められることとして「個別教育計画についての理解を深めること」「全員の児童・生徒をいつも見ることはできないのでチームとして力を付けるための助言を

すること」「児童・生徒を理解する機会を更に増やすこと」が挙げられた。

#### (E) 個別教育計画の作成の充実を図るための校内支援体制や校内システムに求められるものについて

「学校として、専門職が個別教育計画の見直しも含めた作成に関わる校内システムをつくり、現システムの見直しをすること」が11校から挙げられた。

#### エ 調査回答の整理

a 個別教育計画作成については、一部の学校を除いては専門職が参加しており、参加方法に違いはあるが、学校としての取組みがある。

b 専門職の個別教育計画見直しへの参加は配置校の1/3と、不十分である。その理由としては校内支援体制の整備が途上であることが示された。

c 個別教育計画見直しへの参加が示された学校では、次のような工夫がされている。

- ・担任と専門職による日常的な教育実践を通じた意見交換が、関係作りのために行われている。
- ・専門職の役割が周知されている。
- ・個別教育計画見直しを年間計画に位置付けたり、個別教育計画作成に参加したら見直しまで参加する校内支援体制をつくっている学校もある。

#### (3) A校分教室での実践(専門職とのチームアプローチによる個別教育計画の見直し)

##### ア 研究の方針

新学習指導要領を踏まえ、外部の専門機関を活用することで、専門職を含む校内支援体制が整備され、授業改善が進むのではないかと考えた。

##### イ 対象校について

専門職は理学療法士と臨床心理士(以下 専門職C)の2名がA校本校に在勤しており、分教室へは専門職Cが月2回程度来校している。来校時に、個別教育計画作成及び見直しの場を設定しての参加はしていない。しかし、多様化する生徒に関する助言や担任へのサポートは行ってきた。

##### ウ 当初の個別教育計画による対象生徒の実態

真面目に物事に取り組むことができる。一度に多くの情報を整理するのは苦手であり、必要な情報を見落としがちである。そのため予測や見通しが立てられず混乱することがある。

##### エ 実践の方法

###### (7) 期間

前期(7月13日から9月28日)、中期(9月29日から10月15日)、後期(10月16日から10月25日)の三期に分けて進めた。前期で、総合教育センターのセンターアセスメント事業(以下 センターアセス)を実施した(8月26日)。また、各期間毎にケース会議(9月25日、10月15日、10月25日)を設定した。

###### (イ) 研究協力者

担任2名、専門職C

(ウ) 手続き

見直しを進めるにあたり、授業改善につながる個別教育計画作成におけるモデルが必要と考え、「授業改善のプロセス」(第4図)を考案し、実践することとした。授業改善のプロセスは、①生徒のより客観的な実態をつかむための外部の専門機関(今回はセンターアセス)の評価を積極的に活用する。②生徒の学校生活全般のアセスメント(以下 日常アセス)を踏まえ、専門職が外部の専門機関との共通理解を図るために、センターアセスに参加し、ケース会議で生徒の学習上の問題解決の助言を行う。③担任と専門職と長期研究員の三者によるケース会議にて評価(C)、改善(A)、計画(P)を行う。担任は授業実践(D)で明らかになった現状と課題を整理し、授業内容、教材教具、生徒の実態評価など話合いの観点を提案する。専門職は日常アセスによる生徒の実態把握を踏まえて助言する。

オ 実践結果

(ア) センターアセスの評価

8月に実施したセンターアセスの評価を整理した。第2表は、その抜粋を示したものである。

第2表 対象生徒のセンターアセスの評価

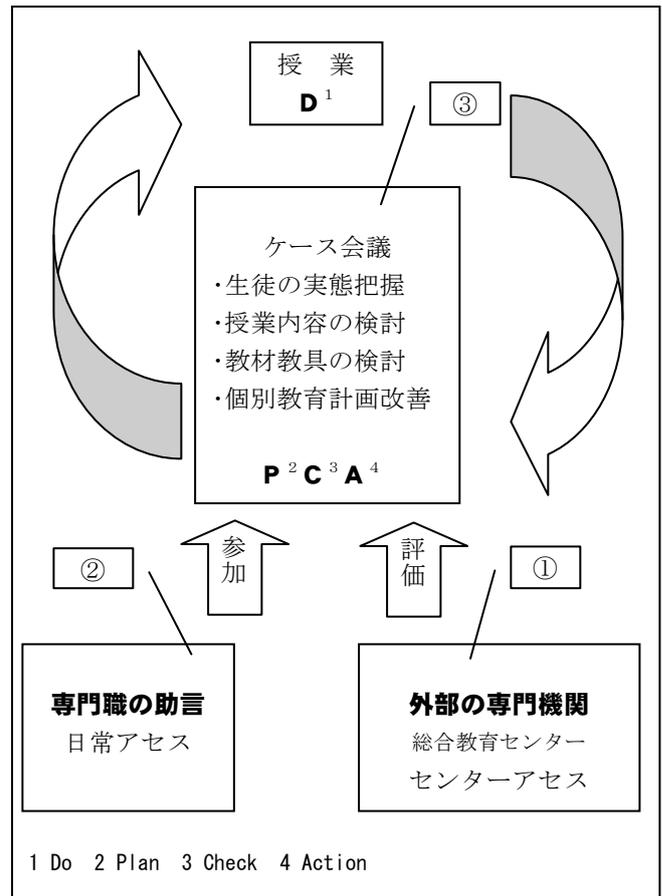
・課題解決の見通しがもてると課題理解が進む
・指示内容を限定して示すと内容の理解が進む
・工程の最後に作業確認を入れると注意喚起が促される

(イ) 学校における実践

前期では、センターアセスの評価を基に支援の方針を検討し、中期では、授業改善につながる教材教具について話し合った。後期では生徒の変容を基に第3表に示したように新個別教育計画の作成を行った。その実践結果を第4表に示す。

第4表 実践概要

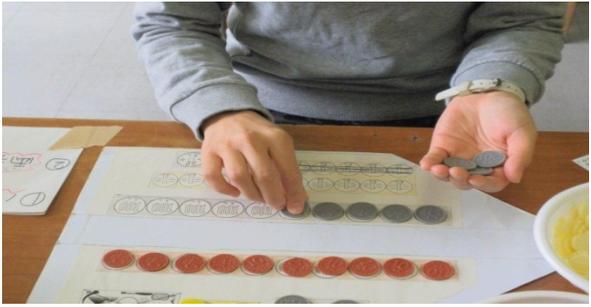
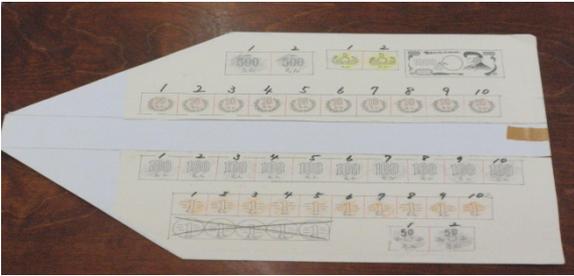
	ケース会議の内容	授業の様子
前期 【授業改善1】	<p><b>授業内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職業「スウェーデン刺しゅう」</li> </ul> <p><b>担任の関わり:</b> 落ち着いて作業に取り組むことをねらいとした。</p> <p><b>指導上の留意点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・伝える情報の整理</li> <li>・メリハリのある口頭での指示</li> <li>・指示書による指示</li> <li>・ガイド</li> </ul> <p><b>教材教具</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運針の方向を分かりやすくするために、針先を赤く塗った。</li> <li>・「①糸を通したら布の端まで針を動かす ②端まで終わったら隣の列に進みで針を動かす」とポイントを箇条書きした指示書を用意した。</li> </ul>	<p><b>対象生徒の変容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休み明け、久しぶりの「スウェーデン刺しゅう」であることや手先の作業は苦手であることも重なり、作業工程がなかなか定着しなかった。</li> <li>・指示書を見ながら作業に取り組むが、担任の口頭による指示が入ると混乱をし、運針がうまくいかず糸を絡めてしまった。</li> <li>・口頭による指示はいったん止め、ガイドをしながら担任と一緒に取り組むと徐々にではあるが作業工程を思い出してきた。</li> <li>・ガイドで作業工程が安定してきたら指示書を見ながら作業速度は遅いが正確に取り組めてきた。</li> <li>・良いイメージで終わるために正確な作業が続けられたところで作業を終えた。</li> </ul>



第4図 授業改善のプロセス

第3表 個別教育計画改善結果

当初の個別教育計画	新個別教育計画
・必要な情報を見落としがちである。そのため予測や見通しが立てられず混乱することがある。	・情報を整理して捉えらるると情報の理解が進み、落ち着いて取り組める。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">中期【授業改善2】</p>	<p><b>個別教育計画見直しの過程</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門職Cによる日常アセスを受け、「工程を絞り指示内容を分割して提示すると理解が進む」と見直し過程を記した。</li> </ul> <p><b>授業内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職業「校内実習 お金セットの袋詰め-第一週」</li> </ul> <p><b>担任の関わり:</b>作業工程を正確に理解させることをねらいとした。</p> <p><b>指導上の留意点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指示書による指示</li> <li>・作業工程の定着</li> <li>・近くからの援助</li> <li>・間違いの修正</li> <li>・確認作業</li> </ul> <p><b>教材教具</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金種の絵を描いた台紙を用意した。</li> <li>・ポイントを強調した指示書を作成した。</li> <li>・「①お金の絵に合わせて並べる。②決められた数を並べる」と工程を絞った指示書を用意した。</li> </ul>	<p><b>対象生徒の変容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指示書により正確な作業になってきた。</li> <li>・不安を感じる時は、そばに担任がいるので「教えてください」と援助を求めてきた。不安を感じる点や対処方法を心得てきた。</li> <li>・確認作業により自分で間違いに気付き修正することができるようになってきた。</li> <li>・しかし、台紙に描かれたお金の輪郭に沿って並べたり、常に左から片手で並べるため作業速度は遅くなった。(写真-1)</li> </ul>  <p style="text-align: center;">「写真-1 作業の様子①」</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">後期【授業改善3及び個別教育計画の修正】</p>	<p><b>授業内容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職業「校内実習 お金セットの袋詰め-第二週」</li> </ul> <p><b>担任の関わり:</b>作業速度と作業量の向上をねらいとした。</p> <p><b>指導上の留意点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・安定した作業の確認</li> <li>・習得できたことへの賞賛</li> <li>・平易なことばによる課題変更</li> <li>・指示書による変更内容の提示</li> <li>・台紙の変更提示</li> <li>・担任による変更内容の教示</li> <li>・確認作業の継続</li> </ul> <p><b>教材教具</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「①決められた数が合えば何番から並べてもよい。②金種は合っていればよい」と課題を箇条書きで示した指示書を用意した。</li> <li>・お金の輪郭を取り除いた新しい台紙を用意した(写真-2)。</li> </ul>  <p style="text-align: center;">「写真-2 輪郭を取り除いた台紙」</p> <p><b>新個別教育計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門職Cの助言を受けて、第3表に示された「新個別教育計画」として改善された。</li> </ul>	<p><b>対象生徒の変容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内実習二週目であるが疲れた様子はなかった。</li> <li>・作業工程は定着した。褒められたことが嬉しく感じた様子で「ありがとうございます」と笑顔で答えた。今までの課題は達成された。</li> <li>・新しい課題の説明は、よく聞いていた。また、台紙と指示書の内容を確認して作業の完成形が変わらないことに気付くと「同じお金セットの仕事ですね」と作業内容を理解した回答をした。</li> <li>・始めはお金の向きをそろえていたが「指示書をよく読んでね」と担任が指示を出すと、声を出して読み直し「分かりました」と確認した。「金種は合っていればよい」の情報が優先された作業が再開された。</li> <li>・両手で作業が行えるようになった。</li> <li>・作業速度と作業量の向上が見られた(写真-3)。</li> </ul>  <p style="text-align: center;">「写真-3 作業の様子②」</p>

## カ 考察

本研究は、アンケート調査を行い課題を整理した。また、研究の方針を立て実践を進めた結果、授業改善ができた。以上の取組みを踏まえ考察を述べる。

### (7) 外部の専門機関との校内支援体制作り

学校で日々行われている授業を改善し、より良いものとするためには、子どもの客観的な実態把握は欠かせない。実態把握が不十分であると子どもや保護者の教育的ニーズに応じた効果的な授業実践は難しくなる。特別支援学校学習指導要領解説自立活動編には、「生徒の障害の状態により、必要に応じて、専門の医師及びその他の専門家の指導・助言を求めるなどして、適切な指導ができるようにするものとする。」（文部科学省 2009b p. 96）と記されている。この研究では、外部の専門機関である総合教育センターのアセスメント事業を活用した。その結果、専門職が参加し、客観的な子どもの実態について、共に共通理解を図ることができた。以上の取組みを踏まえると、学校が外部の専門機関を積極的に活用し、専門職を含めた校内支援体制を作ることが有効であると考えられる。

### (4) チームアプローチによる授業改善と個別教育計画作成について

学校では、子どもの実態把握と並行して日々の授業改善を行わなければならない。特別支援学校学習指導要領解説総則等編には、「特別支援学校には、種々の障害に応じた指導についての専門的な知識や技能を有する教師がおり、児童生徒の多様な実態に応じた指導の充実を図る上で、それぞれの教師の専門性を生かした協力的な指導を行うことが大切である。」（文部科学省 2009a p. 188）と明記されている。そこで、「担任と専門職の専門性が発揮される協力的な体制づくり」が望まれる。そのため、この事例で示された「授業改善のプロセス」（第4図）のモデルを活用することが有効となる。授業で明らかになった現状と課題を次の授業改善に生かせるよう、「Dの後にPCA。PCAの後に再びD」へとつなげることが必要である。

また、このサイクルで作成された個別教育計画は授業改善につながることで、この研究で示された。特別支援学校学習指導要領解説総則等編では、「日ごろの、学習活動を通じて、児童生徒一人一人のよい点や可能性を積極的に評価し、児童生徒の主体性や意欲を高めることが重要である。」（文部科学省 2009a p. 208）と明記されている。授業改善を踏まえて作成された個別教育計画を、日々の指導のツールとして活用することで、児童生徒の主体的な取組みが増えることが、この研究で明らかになった。

したがって、外部の専門機関を加え、教員と専門職によるチームアプローチにおいて、定期的に子どもの課題の達成状況を客観的に評価し、修正を繰り返すな

がら個別教育計画を作成することが授業改善につながり、また、子どもたちにとって、より良い授業になると考える。

## キ 今後に向けて

特別支援学校の授業づくりは、ティーム・ティーチングで行われることが多い。一般的な役割分担としては、全体進行のリーダーとそのサポートをするサブリーダー、子どもを指導する担任に役割分担される。専門職の役割については「協働支援チーム宣言」（神奈川県教育委員会 2010）に触れられているが、専門職の授業への関わり方については触れられていない。チームアプローチの一員として「授業改善につながる授業への関わり方」については、専門職配置校が増えるにあたり、今後、更に研究を進める必要があると考える。

## おわりに

本研究は授業改善につながる「個別教育計画」作成を専門職とのチームアプローチに焦点を当てた。高等部卒業後は「個別の支援計画」に移行していく。将来を見据えたチームアプローチの視点に立った実践をこれからも重ねていきたい。

## 引用文献

- 神奈川県教育委員会 2001 「盲学校、聾学校及び養護学校高等部 新教育課程のために Q & A」 p. 92
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」 p. 133
- 文部科学省 2009a 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』教育出版
- 文部科学省 2009b 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）』教育出版 p. 96

## 参考文献

- 神奈川県教育委員会 2010 「協働支援チーム宣言」
- 神奈川県教育委員会 2010 「特別支援学校 幼稚部、小学部及び中学部教育課程編成のためのQ & A カリキュラムケースブック95」
- 神奈川県総合教育センター 2009 「特別支援学校の特色あるカリキュラムの開発～分教室を対象として～」
- 独立行政法人国立特別支援教育研究所 2008 「肢体不自由のある子どもの教育活動における『評価』及び『授業改善・充実』に関する研究」
- 広島県教育委員会 2007 「盲・ろう・養護学校 授業改善ハンドブック」